

黄昏からの眺め その二

みずき 啓

二〇二〇年の二月、クルーズ船ダイアモンド・プリンセス号は、侃々諤々、迷走の果てに横浜港に横付けされることになった。そして、船内でおきたコロナ感染の連日の報道を、私は遠雷程度に聞いていた。

その二月半ばの夜、早い時間から布団に入って本を読む習慣の私はもう寝室にいた。居間の夫が受けたのは、森藤さんからの久しぶりの電話だった。私が学生のとき、彼女は国文科の二人いる助手の一人で、助手のうち片方は将来の助教授予備軍、すでに、どこかの大学で講師もしている。彼女は近くの高校の講師をしながらの万年助手の位置にあつて、しょっちゅう学生に相談事などねじこまれて

「めんどくさいわねえ。自分でなんとかしなさいよ」
ぼやきながらも、学生のどんなに身勝手でも非常識な言いつい分にも、決して相手を頭つから否定はしない。なんだかんだでなんとなく納得して帰っていく。自宅に押しかけられることもしばしばだったらしい。

九二才になった近頃では、彼女と私もお互い変化の

少ない日常で目ぼしい話題もない。しかし、彼女はいったん喋り出すと腰が入りゆつたりのつたり、二時間の覚悟が必要なのが私には辛い、年に一度位の電話になつていた。

しかし、森藤さんとは激しく電話し合った長い時期もあった。彼女がコーラスグループで知り合い結婚した高校教師の夫がPTAの役員だった主婦と出奔し、心ならずも離婚を迫られた。あげく、

「貴方が居たんじゃ、息子が家に戻れない」

同居していた彼の両親の家を追い出されてから一〇年以上経った頃、私との電話話しが始まった。その一〇年は、両親の離婚に傷を負い荒れる二人のお嬢さんを抱えての血まみれの十年だった。そして、腑に落ちない離婚の顛末は何度聞いても、その度に微妙にずれるのだった。まだまだ離婚の一件が彼女自身の内で消化しかねているのだ。

私は私で頻繁に問題が発生し、日本も騒がしく、互いに喋り止まらない。

森藤さんも次女、長女と結婚、そして自身の退官後、カルチャーにいくつかの講座を持ち、ずっと苦勞していた目や膝の手術、スイミングプール通い。

私の子供達も大きくなると、次の電話との間隔は開くばかりだった。

その夜の二時間近い森藤さんの話しは、自宅から割と近いグループホームに入ることになった、だった。どんと、胸が突かれた。森藤さんの膝が二階に上がれなくなつた八十前から、近く住むお嬢さん達が土曜日には買物に連れ出し、週一で掃除に入り、森藤さんはその都度報酬を渡していたから、あの家での一人暮らしはまだまだ安泰と、私は思い込んでいた。

何種類もある薬（森藤さんは少しでも体に不調を見つけると、即医者に行く）を、お嬢さん達が一回分づつ小分けして置くのに、飲み忘れたりでたために飲んじやったり。心配したお嬢さん達が自宅からお嬢さん達からも近いグループホームを決めてきたそうだ。

「子供たちはその方が安心なのよね」

森藤さんのこの期に及んでの最大の関心事はやはり、（なぜ自分が助教授になれたか）だった。しかし、一介の学生、しかも国文科でもなく、ただ親友が二人国

文科だったからの理由で国文の研究室でゴロ巻いていた私には、一方的に聞くだけしかできない。

彼女があんなに何度も家に遊びに来てくれたのに、最初は我が家の周りが正真正銘の田舎だった頃。私の子供達も幼く、

「あんたの子達ったら、草っ原でくるつとお尻を捲くつて、おしっこするんだからねえ」

静岡の茶どころ育ちの彼女にとつては、自分の子供時代がダブルらしかつた。

森藤さんが帰つた三日後、郵便受けの下に草むらにびしょ濡れの住所録が落ちていた。細かい字でびっしり詰まつた氏名から、森藤さんと判明。助教授とはかくも人間関係が凄いかと感じ入ってしまった。

彼女と、お嬢さん二人と次女の連れ合いが、揃つて赤ちゃんグズのお古をもらいに来たりしたのに、一度も訪問しないのは失礼過ぎるだろう。

森藤さんが、すでに遠出は億劫になつた八十二才の時、国文卒の親友とおじやました。

森藤さんは青葉台の駅に迎えに来てくれた。

「ここがお気に入りのケーキ屋さん。口出しなしよ」
彼女が勝手に判断、勝手に払う。背中はいんもり

丸くなつたがエネルギーギツシユ。そのままクシーで近場の彼女眞頂のお寿司屋へ。一万五千円ほどの支払いは親友と二人で。

青葉台の駅から森藤宅へは、大通りの緩い登坂を歩いて二〇分くらい、寿司屋はその途中にある。大通りから少し入った、日当たりのいい崖つぶちの家に、かねて聞き及んだ巨大な猫、オカアチャンと住んでいた。オカアチャンは図体とは裏腹にシヤイ系、あるいは人嫌い系らしく、お尻をたらしつてのつそり二階へ消えた。

窓いっぱいキッチンに面して、優に十人は座れる。大ダイニングテーブル。うなたつぷりとしたテーブル。お嬢さん達家族との頻繁な全員集合のため思い切つて特注した、と聞いていた代物だ。その賑やかさもさんざん聞かされていた。今は彼女の（なんでも机）。そのテーブルが、ワンルームの残りの生活臭の濃い四分の三を睥睨している。私の無機質な家にくらべて、（私はちやらんぼらんな性格のくせに身の回りが片付いてない、目が疲れる。一種の義務感とか強迫観念が、ほらきちんとしる整理しろとせつつく）心休まる、居心地がいいと言うか、他人の家だからこちゃこちゃしてもそれもいいもんだと言うか、まあ国文的、有機的なんだろうなあ。

私に貰つてくれない？と打診の来た、高価なシリールズもののガラス食器がそっくり収まった、細長いカッポボードも鎮としていた。ソファアや椅子を取つ払つて、たつぷりしたベッドと本棚。こじんまりとしかし豊かに纏まつた、女の城の暮らしぶりが、見て取れた。

離婚して正解だった答えがここにある。

その後、元婚家の両親は認知症だのなんだのと、大変だったらしい。結婚生活をあのまま続けていたら、助教など寝言で終わっていた。

元亭主は孤独に逝つた。

三月。コロナは拡大する。

グループホームの森藤さんから葉書が届いた。裏面はアイルランドの風景。年期の入った絵葉書だ。彼女がアイルランドへ行つたのは、確か四〇年位まえ。

「葉を正しく飲めなくなつて、グループホームに入つた。孫がひ孫を連れて、正月の挨拶に来たと娘が言うけれど、記憶にない。一人暮らしが困難になりました」、ギクシヤクとしつかりしない字でみっしり書かれている。漢字だけは難しい字も含めてさすがに正確に書かれていた。私がショックを受けたのは切手の位置。書き出す前に張つたらしいが、底辺ぎりぎりの真ん中辺

りにペタンと。そして、本来は切手を張る場所に書かれた住所が、これは解読不能。

（森藤さんとの絆がこれで、切れてしまったのか。もう連絡が取れなくしまったのか）と私は愕然とした。グループホームに入所したのは、あの夜の電話の翌日だったことも、文面から分かった。

三週間位して、また絵葉書を貰った。この度は日本画だった。切手の位置は相変わらずだったが、住所とグループホーム名は判読できた。

私はほくほくして、手紙を送った。すると、折り返し電話がきた。いつもの森藤さん、変わらぬ喋り方、変わらぬ内容だが、携帯の番号入力ができなくなつて、介護の人にやつて貰ったと言う。

まだ、コロナは収まらないが、彼女のグループホームのホームページを開けると、九四才の森藤さんに会える。十二年前と同じ豊かな銀髪。上品な細面に愛嬌を湛えた受け口。自室の机で彼女は大きく新聞を広げていた。笑ってしまった。

「この頃、新聞読みで一日が暮れてくの」
前から森藤さんはよく言っていた。人間、どこにいて

もその人自身を続けるのね。自然に囲まれたグループホームでのイベント満載で賑やかに穏やかな日々がホームページから見えて、嬉しいです。クリックすれば、いつでも季節ごとの新しい彼女に会える。

森藤さんの夜の電話から四、五日して、内ノ浦さんから電話をもらった。

彼女は、私が立ち上げメンバーの一人だった英会話サークル（私がやめて五年、計三十年位続いた）に後年参加してきた人。慶応卒、司書の資格を持っている。くず葉台団地の中古の家を買って、横浜から引っ越してきたと言う。転居の多い人らしい。私の家からはバス通りを横切ればすぐの近さ。

私より、五つかそれ以上年上とお見受けする。静かなエネルギーを感じさせる声、笑顔を絶やさぬ、育ちの良さを感じさせる雰囲気。イオン御用達の私よりはるかランク上の装い。

サークルは月に四回、東海大学の英語のアメリカ人教師が講師に来る。内ノ浦さんは半年ほど皆勤賞だったが、突然来なくなった。病欠だと言う。三ヶ月欠席して、また一年続いたと思うとばたつと来なくなる。

二〇年以上前から鬱病を抱えているらしい。私は双極性だろうと考えていた。鬱の時には、寝たきり状態で電話も出られない。鬱が明けるとさあ元氣印。サークルのパーティを彼女の家で催したりした。サークル唯一の旅行は彼女の提案かつ幹事。葉山だか逗子だかの国際大学のセミナーハウス泊（お風呂は水着着用）だったが、彼女は分刻みの企画書を持ち込み、食後は別室をキープ、ゲームタイム。私達は三角帽子を被せられ、彼女考案のゲームと手製のゲームグッズで、必至に盛り上がった。なにしろ分刻みの企画なのだから修学旅行以上。翌日の鎌倉のお寺も時間に従いスムーズに廻るつきやない。昼食のレストランも予約済み。鎌倉に住んでいる知人と計画を練上げたとのこと。その日は計画的か偶然か八幡宮の流鏑馬に遭遇した。

内ノ浦家でのパーティも旅行も、シャリーンが講師のときだった。東海大学では、外国人講師は普通六年契約で切られる。シャリーンは去り、優秀にして誠実なPJに変った。クリスマス会は彼のアパートに招待された。その時PJは、話しは聞いていた韓国から連れてきた青年とベッドを共有していることを、隠さなかった。以前から同性愛者とは思っていたが、他のメ

ンバー達も、ベッドを見ながら、普通にスルーしたのには感服してしまった。東海大学には外国人のホモ倶楽部があると聞いている。

PJもその後を継いだメロディーも実力のある人で、六年契約をクリアして教授待遇になった。

メンバーの何人かは講師達と個人的に親しくする。内ノ浦さんもシャリーンと親しく、またPJの韓国人青年に連れられて、韓国へ行った。彼女には韓国人と結婚して、何かの事情でほとんど会えなくなったお嬢さんがいる。きっと、涙・涙の旅ではなかったか。

鬱ではない期間、彼女ははっきり過剰だった。

ビール造りのキットなるものがあるらしい。キットに従って、彼女は一ガロンのビールを完成させた。夫婦とも飲む方でもないのに、どうするんだろう。用具の殺菌がポイントらしい。

臭木染めしたいと言われ、一緒に臭木を探しに行く。我が家の庭の、最後にジュースに絞った残りの柚子の実、もう痛み始めているのを欲しいと言う。柚子は棘のある木で挽ぐのは一苦労。好きにさせた結果、彼女が両手に下げた大量の柚子を見て驚き、私は車を出した。とてもじゃないが歩いて運べる重さではなかつ

た。この過剰なエネルギーと鬱の時のマイナスエネルギーを合計すれば、丁度好い具合なのに残念。

内ノ浦夫妻は揃って鍼灸師に掛かっていた。その鍼灸師が自彊術なるものを教えているというので、彼女は団地の自治会館にお教室を用意した。教室開きの食事会も生徒集めも彼女の力瘤だった。整体師とか指圧師とか、(体のことなら、そこいらの医者の上を行ってるよ)と広言したがるのもいる。この鍼灸師のしゃべりは詐欺師の上を行っていた。じきに、内ノ浦氏と彼が不仲になり、教室は四回であえなく終了。

彼女はまた様々な懸賞やご招待に頻繁に応募した。

「葉書を出したから、当たったら一緒に来こうね」

極端に倍率の低い(大山薪金)に当たってしまった。

あれはだいたい当たるもの。大山講の人達のお誘いで、私は特等席で見ることがある。

伊勢原から大山へのバスの中、後ろの席の彼女が

「年金がもう七万円位多いといんだけど」

「下の息子の結婚に百万位渡してやりたいんだけど、これがなかなか大変なの」と、囁く。

彼女の金目の装いを見慣れているだけに軽く驚く。

大山豆腐のお店で、心ゆくまで食事を取り、薪金の列に並んだ。彼女は仕舞か鼓を経験していたらしく、

能にも演者にも詳しくかった。

長い間にはサークルメンバーの出入りはあるが、十人ほどのメンバーのうち三人が更年期に軽い鬱になった。それ以外に、早稲田の英文出身の岡部さんは、最初からうつむきがちで講師に促されなければ、発言しなかった。その内、席に座っていられる時間がだんだんと短くなる。一年でサークルをやめた彼女が、私の家に来たがるのいいよと言うと、ほとんど黙って向こう側に座っている。私もだいたい黙っている。二時間位で彼女の気分が変わり、歩いて十分の自宅に帰って行く。岡部さんも私も内ノ浦さんから

「カットが上手よ」

と、勧められた美容院に行っていた。彼女の人格崩壊の過程は、彼女と私のメッセンジャー化していた美容師から、亡くなるまで逐一聞いていた。

「岡部さんが電話して欲しいって」とか

「岡部さんが病院にお見舞いに来て欲しいって」

秦野病院は、ナースの見張るゲートを通るシステムの、精神科病院だった。彼女は明るい広めの個室に入っていたが、高めの窓には鉄格子が嵌まっていた。

内ノ浦さんが二月半ばに電話してきたとき、岡部さんはみまかった後だった。だが、内ノ浦さんは岡部さんを覚えていなかった。

内ノ浦さんのさよなら会をレストランでしたのは、岡部さんと私の三人だった。同じ鬱病同士で二人は親しかったのに。内ノ浦さんの記憶に残っているサークルメンバーは一人もいなかった。

彼女が英会話サークルに在籍していたのは四年位だったろう。羽田空港に縄文犬、柴犬のさくらを迎えに行き、夫婦で可愛がつていたが、そのさくらをめぐって、ごくごく親しい自彊術にも参加していた、はず向かいの安田家と内ノ浦氏が陰悪になり、(労働省かなんかの国家公務員だった彼は、我が家で食事を一緒にしたこともあるが取っつきやすい人ではない)内ノ浦氏の友人の居る、

「暖かいから、鬱にもいいのよ」と、都城に越して行った。

気楽に引越しをかさねる夫婦だった。確かにその後彼女は二年以上発病しなかった。年賀状や電話のやり取りをしていたので、年賀状がないと、鬱期だとわかる。また鬱明けには葉書や電話がある。

次は、息子達家族のいる神戸に転居し、年賀状は家族揃った写真入りになった。認知症を発症し、柔らかに笑む内ノ浦氏を真ん中にした賀状が最後の二回。去年、年末に年賀欠礼の葉書が神戸から届いた。

そして、二月の電話では、一月の末から百合丘のサービス付高齢者住宅に居ると言う。

「高齢のため、アパートは借りられないのよ」

「年金の範囲内でやれそうだから」

二人の息子達家族も神戸を引き上げたそうだ。興奮気味の彼女は前向きそのものだった。

「役所に行つてね、認知症の夫を送った妻の会を紹介してもらつて、入会したのよ、すごく楽しい」

「三月十八日が一回忌だから、それが済んだ三十日に会いましょうよ。前もって頼めば食事もできるから」

「日曜日(四日後)までに、住所と電話と三十日の時間と会う場所を葉書に書いて送るから」

その葉書はついにこなかった。またいきなりの鬱に没入してしまったのだらうか？あれから年賀状もこない。私は内ノ浦さんとの絆を失ってしまった。

永遠に。